

「中江藤樹とその母」 郷学研修所刊「こころ」

平成17年4月号より

親子といえは、母と子の情愛はこの世で最も美しいものの一つである。だが、親は、我が子を甘やかしてはならない。逆に子に厳しくして、強い立派な人物に育て上げる責任を負っている。子はそういう親の心根に感謝し、孝養を尽くすことを責任として受け止めなければならぬ。

次の話は、戦前の日本人なら誰もが知っていた、伝説的な逸話である。中江藤樹は、江戸時代の陽明学者であるが、まだ幼いころに生地の新江から、遠く離れた伊予大洲藩に学問修行のため赴いていた。ある寒い冬、

藤樹が一生懸命勉強していたとき、偶然、あかぎれによく効くという膏薬が手に入った。幼い藤樹の脳裏に、母が井戸端で働いていた姿が、ふいに甦った。母は冬になると冷たい水を扱うため、いつも両手の指をあかぎれだらけにしていた。その痛ましい様子を思い出し、いたたまれなくなった藤樹は、すぐさま仕度をして大洲から新江に向かつて旅立った。数日かけて新江に辿り着いたとき、雪深い里の家の中で、母は機を織っていた。「母上、私です。あかぎれの葉を持ってまいりました。」すると母は、一瞬驚いたもの

の、すぐに状況を飲み込んで、「あなたは学問をするために大洲に行ったのではありませんか。途中で帰ってきてどうします。家に入ることは母が許しません。お帰りなさい。」「でも母上・・・。」「藤樹、これを見なさい。」と言って、母は織りかけていた布をばつさりとは断ち切って見せた。

「あつ・・・もつたいない。」「あなたが学問を諦めることは、これと同じことです。どんなに辛くても頑張ってください。この母への孝行ですよ。」

こうして藤樹は家にも入れてもらえず、雪の中をとぼとぼと

と大洲へ戻っていった。我が子の哀しそうな姿を、母は戸口の陰でそっと見送り、さめざめと涙を拭いていた。

翻って現代社会の親子像を見るならば、こうした篤い親心もめつたには見当たらない。それどころか、親孝行という言葉すら、なぜか風当たりの強い時代となっている。親と子の情愛をもととした責任の結びつきは、人間道徳の基本である。にもかかわらず、それが今日ほど薄れつつあるときはないと見えるのであるが、どうであろうか。

真の愛情とはこのようなものを指すのではないでしょうか。それが本人の人権を尊重していることになるものと思います。

人権擁護委員 神田 勝雄

我が家のニューフェイス



吉田 莉り 咲あ ちゃん

生年月日 平成24年4月10日
(大字坂本)

お父さん：雅 俊さん
お母さん：翠 さん

こんにちは！りあです♥読み間違えないでね！！ママとパパは私にメロメロでお兄ちゃんがヤキモチやくの。可愛いすぎてごめんなさい♪(笑)

ハイハイも伝い歩きも速くて、ママははててご舞いな毎日だけどがんばってね♥



ご協力ありがとうございました

ございました

歳末たすけあい運動に次の方よりご寄付をいただきました。

◎東秩父村商工会女性部様 1万円

平成24年度の共同募金、歳末たすけあい運動にたくさんのご協力をいただき、次のような実績を上げることができました。

・共同募金

- (戸別募金) 31万2300円
- (窓口募金) 800円
- (職域募金) 1万4000円
- (学校募金) 1万3291円

・歳末たすけあい運動

- (戸別募金) 42万 400円
- (窓口募金) 1万 715円

なお、共同募金については、村内を含め、埼玉県内で各種福祉事業に利用されます。また、歳末たすけあい運動については、行政区長会、民生委員さんのご協力を得て、村内の配分対象者100名の方に歳末慰問としてお届けすることができました。